

「社会性の起原—ホミニゼーションをめぐって」2019 年度第 1 回共同課題研究会報告

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2. 研究会基本情報

日時： 2019 年 10 月 19 日（土） 13:00～18:30

2019 年 10 月 20 日（日） 10:00～15:30

場所： AA 研マルチメディアセミナー室（3 階 306 室）

報告者：

10 月 19 日（土）

1) 中村美知夫（AA 研共同研究員・京都大学）

「社会性」とは何か、そしてその「起原」とは

2) 船曳建夫（AA 研共同研究員・東京大学名誉教授）

社会性の基礎としての人類の直立

10 月 20 日（日）

3) 寺嶋秀明（AA 研共同研究員・神戸学院大学）

ペアボンド・ファミリー・バンドーヒトのペアボンドの出現と変遷

4) 藤井真一（AA 研共同研究員・国立民族学博物館）

共存作法—ソロモン諸島ガダルカナル島における競合と共生のあり方

3. 内容（要旨および質疑応答・議論）

3-1) 「社会性」とは何か、そしてその「起原」とは（中村美知夫）

要旨：

近年、霊長類の研究でも「社会性 sociality」という語をよく目にするようになった。一方、かつて頻繁に用いられていた「社会構造 social structure」という語は、限定的な意味（*sensu* Kappeler and van Schaik 2002）で用いられるようになり、かつてほど著書や論文のタイトルでは見なくなった。「起原（起源）」とは物事の起こりや始まりということだから、「社会性の起原」という場合、社会性が存在しなかったところから社会性が始まった「ある特定の起点」を問題にすることになる。

さまざまな研究で用いられている「社会性」を見てみると、だいたい扱っているものが違っていそうである。人によって「社会性」の意味が異なり、そしてその違いが共有されていないと、その起原を議論することは困難である。そこで本発表では、若干のレビューを通して、「社会性」という語がどのように用いられているのかを整理しておくことを目的とした。

まず、辞書的な意味を強引にまとめると、I) 集団を作って生活しようとする性質、II) 他者とうまくやっていく能力、III) (現代的な意味での)「社会」に広く関連する性質、IV) 社会に固有の性質、といった感じに分けられる。

霊長類学やその近隣分野の研究による「社会性」の用法も多岐にわたるが、再び強引にまとめると、以下になるだろうか。

- A) 生き物であること (今西錦司による特殊な用法：今西 1941)。
- B) 集団で生活すること。集団の作り方。かつて「社会構造」と言われていたもの。
- C) 集団内で他個体との関わり方。社交性と置き換え可能？
- D) C のうち、利他性の意味を強く含むもの。「ヒトの」とか「高度な」といった形容詞が付けられることが多く、ヒトに独特なもの（もしくはヒトで極度に発達したもの）と捉えられている。
- E) D のうち、とくに包括適応度で説明できないもの (大澤真幸の〈社会性〉：大澤 2000)。

このうち、A は明らかに辞書的な意味からは外れるが、すべての生物に社会（種社会）を認める今西の立場からすれば当然だと言える。B と C は、概ね辞書の意味の I と II に対応する。そして欧米の研究論文の中で社会性が用いられる場合は、このいずれかの意味であることが多い (たとえば、Shultz et al. 2011; Lonsdorf et al. 2014 など)。一方、日本人研究者は、D や E のような意味で社会性を用いることも多い (たとえば、松沢 2011; 松本 2017; 山極・鎌田 2018 など)。

A の意味での社会性の起原は、ほとんど生物の起原と同義となり、B の意味では単独生活者が集団生活をするようになった時期を指し示すことになるだろう。そして D や E の意味では、チンパンジーの系統と別れた後、もしくはヒトという種の誕生後といった、もっと新しい時期に起原があることになる。

欧米の研究者が D や E の意味で社会性をほとんど用いないのは、ほぼそれと同じ内容を示す「向社会性 prosociality」(Jensen 2016) という語があるからだと思われる。向社会性とは、他個体を利するような行動性向のことだが、その際そうしようとする意図や動機を必須のものとするのか、結果的に相手を利するようになればよいと考えるのかについては、いまだに研究者の間で意見の不一致がある。それと関連して、向社会性がヒトだけのものなのか、他の霊長類と共通した特徴なのかということについてもいまだに議論がなされている。

全ての生命に社会性を認めるという今西のような立場から、群れ生活や社交性とほとんど同義のような使い方、そして大澤の〈社会性〉や「向社会性」と同義の(ほぼ)人間限定のものまで、社会性というものが示す範囲は広い。もちろん同じ「社会性」という言葉で語りうるのだから、この広い範囲の全てをカバーするなんらかの性質を抽出することは可能なかもしれない。

社会性を私自身がどう捉えるのかについて、一応の見解を述べておこう。社会性は社交性(他個体とうまくやっていく能力)とはちょっと違うし(「社交性が低い」という社会性も

あるだろう)、量の問題でもない(「オスのほうがメスよりも社会性が高い」といった言い方には違和感がある)。また、集合性とか集団を作る傾向ともイコールではない(オランウータンの単独性を彼らの社会性と捉えることは可能だろう)。ましてや、向社会性というんだかポジティブな面だけに社会性を限定することもできない(ネガティブなものも含めての社会性ではないのか)。

この研究会ではおそらく「ヒトに特有の」社会性に限定して、その起原を問おうとしているのだろうと思う。その作業は、大澤がまさにそうしているように、ヒト以外の社会性との間に明確な線引きをしない限り困難であるように見える。私が上で述べたような、ぼんやりとした社会性の捉え方では、まだその起原を語るところには至らない。

引用文献：

今西錦司 1941/2002. 『生物の世界ほか』 中公クラシックス.

Jensen K 2016. Prosociality. *Curr Biol* 26: R739–R755.

Kappeler PM, van Schaik CP 2002. Evolution of primate social systems. *Int J Primatol* 23:707–740.

Lonsdorf EV et al. 2014. Boys will be boys: Sex differences in wild infant chimpanzee social interactions. *Anim Behav* 88:79–83.

松本晶子 2017. 「ヒヒとヒト——サバンナの隣人から見える社会性の起源」『現代思想』45(12): 175–189.

松沢哲郎 2011. 『想像するちから』 岩波書店.

大澤真幸 2000. 「〈社会性〉の起源・序」『理論と方法』15(1): 21–36.

Shultz S, Opie C, Atkinson QD 2011. Stepwise evolution of stable sociality in primates. *Nature* 479: 219–222.

山極寿一・鎌田浩毅 2018. 『ゴリラと学ぶ——家族の起源と人類の未来』 ミネルヴァ書房.

質疑応答と主な議論：

<人類学、霊長類学、心理学における社会性 sociality>

- 社会人類学、文化人類学における sociality の使われ方
 - ・ 近年(2010年代?)まではあまり使われていない
 - ・ エスノグラフィーに興味を持つ研究者の間では使われない
 - ・ human nature や霊長類とヒトの連続性を考えたい研究者の間で使われる
 - ・ 社会人類学において、個人に焦点があたるにつれて使用されるようになった
- 霊長類の社会に関する用語の整理 (social structure、social organization)
 - ・ sociality は個体に基づく概念
 - ・ social structure : 集団の特徴、social organization : 集団の性構成
- 人間の発達研究における sociality の定義

- ・物理的認知とは異なるものとして、社会的認知がある

<社会性 sociality の適用範囲>

- 集団の安定性・認知・認識を基準とした社会性の議論
 - ・メンバーシップが安定している、互いに識別しあっていることが重要ではないか
 - ・個体間の交渉を介して共存することができることから、識別だけの問題ではない
- 同種の集団に限定されない概念としての sociality（混群、人 - サル関係）
 - ・ social structure や social organization は単位集団に関する概念
 - ・ sociality では単位集団に限定されない議論が可能である

<社会性科研における方向性>

- 研究の方向性
 - ・ヒトの社会を基点として、共通項のあり/なしを議論していく
- anti-sociality という研究が成立するか
 - ・敵対的関係、制度・規範に反するものが該当するのではないか
 - ・本研究会では、競合関係も sociality に含まれるものとしてあつかう

3-2) 社会性の基礎としての人類の直立（船曳建夫）

要旨：

四足の哺乳類、ことに霊長類、類人猿には二足直立や二足直立歩行を行うことが見られる。しかし、人類の成人は常時それを行っていることで特異である。その特異性の理由を探る中で、俗説あるいは通説として、二足で直立することによって、前足が手になり、手が道具を使い、そのことが知能の発達と正のフィードバックが生まれ、いまの人間の、他の生物からは抜きん出た文化性が形成された、という考え方が生まれた。本発表者はその通説を理論づけようとする多くの仮説を通覧したが、それらの中に共通する欠陥を見出した。

欠陥とは、それらの仮説、学説が、人類の二足歩行 → 手による道具使用 → 知能・文化の発達というプロセスの進行が「一つながり」のものである、と認識しているところにある。人類の発達史の7百万年のあいだでは、二足歩行が不安定あるいは低速あるいは短距離の移動方法であることを脱して、生存において有利に働くほどの運動能力として得られたのは、発達史の後期に至ってからと考えられている。そもそも二足で直立出来るからといって、必ずしも二足で歩行することにつながらないことは他の直立する哺乳類に明らかである。また、人類初期のよたよた歩きと手による道具の使用のあいだには懸隔がある。石器を端緒とする道具の使用は座位によって行われる方が安定的である。さら

に、弓矢、投げやりといった攻撃道具を使用する際の二足歩行、また二足走行は、二足による移動が運動として完成を見せてからのちのことであろう。

発表者は、直立に関する、現代の人類や過去数百万年の人類についての文化と社会性に関する著作にあたり、1) 直立と二足歩行とは別の二つのことであり、2) 直立には歩行とは独立した文化・社会的な意味がある可能性、の二点に気づいた。

この二点を説明するために、人類が直立した際の、顔から胸、腹、性器、内股に至る部位を「直立面」と呼ぶことで理論化を進めようとする。この、本来は体の中で柔らかく弱い面を他個体に対して開き、相互に受け入れることが人類の社会性の根幹であると考え

る。

直立面による行動を三つに分けて考える。

まず第一に、個人の「身体と道具」の領域における直立である。人にとって、直立面を維持することが道具の使用には適切である。道具の始まりとしての石器には、座位であれ、直立であれ、振り下ろす動作が必要である。四つ足を付けた姿勢による道具の使用は難しく、道具の発達、文化的進展は起こらない。より精緻な道具の使用、および「手」による道具の製作には、直立姿勢が必要である。

第二に、集団あるいは共同体の他個体との「社交」の領域における直立面の対峙である。社会性の維持には、直立面を見せ合い、体と顔で表現することが人類によって重要であったと推測する。これは第三の親愛・性愛における直立面と強く連関するが、それはのちに触れる。言語の端緒としての音声を特定の他個体に向かって発するに、本来360度に広がるはずの音声を、特定の個体に対面的に交わすこと、また少数集団の他個体に、例えば車座になって直立面を見せ合うことで親愛性を示すことが出来る。それによって、初めて音声は言語となった、と考える。また視線を交わし合う、表情を読み取る、ということも、直立面による対面と捉える。さらに文化的な表現としては進んだものである「挨拶」という「儀礼的言語」を交わすことも、直立面の活用によって行われる。同時に、直立面は威嚇、威信といった社会的表現の媒体でもある。

第三に親子の関係、性的、次世代を生み出すパートナーとの「親愛・性愛」の領域における、直立面の相対と接触である。性行為を対面的に行うことのある人類は、その点において特異である。それは、性行為の個体間の中で、「暴力」が後退し親愛と継続性が出現することである。そのためには、男女の直立面に性器があり、乳頭が乳房という「意味としての性器」になることはその後退と出現に、より適切となる。母子の間で授乳時に直立面が相対する「抱っこ」の姿勢を取ること、「夫婦」の間で性交時に直立面が相対する姿勢を取りうること、それぞれは、母子、夫婦ともに、その自然過程としての授乳、性交が、親愛、性愛を強化する社会的な行動となったことを意味する。そうした親愛のコミュニケーションは、親子、夫婦にとどまらず、「友人」間の抱擁、ハグや、握手などの挨拶儀礼にも、同様な直立面の活用としてみられる。

発表者は以上の仮説とそれを支持する論点を、様々な行動や現象の中に見いだし、指摘す

ることで、今後の議論を充実させる可能性を示した。

質疑応答と主な議論：

<直立面にみられる人間（ヒト）独自性>

- 直立面の議論は人間独自のものか？
 - ・サルも座った状態で体前面を見せることが可能である
 - ・人間独自のものとは思わない、むしろサルの姿勢に着想を得た
- 直立面をさらしながら移動するのは人間に特有
 - ・サルも直立姿勢をとれるが、その状態で移動はできない
- 直立二足の姿勢はヒトに特有か
 - ・鳥などでも二足姿勢で直立面を提示することができる
 - ・さまざまな種で比較するのはどうか
 - ・様々な種間のギャップを補完することで理論の補強や新しい展開がありうる

<触覚との関連>

- 直立面の接触と母子関係
 - ・ヒトでは赤ん坊が母親につかまれない
 - ・授乳や抱っこの姿勢が直立面を介したコミュニケーションにつながった
 - ・サルにおいても、さまざまな社会関係が母子関係からきている気はする
- 交尾・性交との関連
 - ・ヒトでは対面的な性交がみられる
 - ・対面での性交は親和性を強める（ペアボンディング）
 - ・後背姿勢には平和と暴力の両方の要素がある
 - ・性に暴力性を考えるのはヒト的な考え方
 - ・霊長類ではメスが合意しないと交尾が行えない
 - ・体格差による force はあるが、暴力とは違う、aggression と coercion の対比
- より原初的なコミュニケーション

<距離との関連>

- 交渉距離との関連
 - ・ボノボの GG ラビングに代表されるように、サルでは接触を伴う挨拶がみられる
 - ・人間ではインタラクションの際に距離をとるようになり、接触しない挨拶が出現
 - ・（人間では）距離をとる必要から対面交渉をするようになった
 - ・ストレスや身分制の出現によって対面交渉の必要性が生まれた（距離ではなく社会ということ？）

<視覚との関連>

- 視線との関連は？（ヒトの場合、サルの場合）
 - ・人間の場合、顔の向きと視線の向きが一致している
 - ・ニホンザルの場合は視線をコミュニケーション（威嚇）として使っている
 - ・（ヒト）20m 離れていても視線を認知でき、直立面だけでなく視線など複数の要素をコミュニケーションに取り入れている
- 直立面の暴露とグルーミングの同質性（視覚的なグルーミング）
 - ・直立面（体前面）という脆弱な部位をさらけ出している
 - ・威圧にもつながる（弱い面をさらせるくらい強い）
 - ・サルも直立面をさらすことができ、直立面をさらすことがグルーミングに代わるものとして位置付けることは困難
- 直立面のうち、上半身と体全体を区別する必要
 - ・立ち上がっていないと見えない部位（下半身）の意味、重要性を議論しないと、霊長類との連続性が考えられない（霊長類でも上半身は見える）

<体の向きとの関連>

- モノ、音と体の向き
 - ・子どもの遊びでは、モノを介することで、対面あそびがうまれる
 - ・言葉は対面性がなくても方向性を持っている
 - ・まず言葉（音）が意味を持ち、その後に体の向きが意味を持つようになったのでは
- 直立面のうち、顔と体の一致（ヒト vs そのほかの動物）
 - ・顔と体の向きがセットであることが強制されていたが、社会性を獲得することで、顔と体を別々に使うことができるようになる
 - ・そこに、社会性がどう影響してくるのか検討する必要がある

<他者との関連>

- 受け手との関係
 - ・チンプでは、合流直後に相手と向き合うことは少ない
 - ・受け手（コミュニケーション相手）がどうとらえるかによって交渉の仕方が変わる
- 二足歩行やロコモーションへの議論の発展可能性
 - ・二足歩行やロコモーションへの言及など議論の拡張が可能

3-3) ペアボンド・ファミリー・バンドーヒトのペアボンドの出現と変遷（寺嶋秀明）

要旨：

はじめに

「ペアボンド pair-bond/ pairbond」とは自然界においてオスとメスとの生殖単位を意味する一般用語である。人類においてはペアボンドは一夫一婦制（単婚制）社会などで顕著な現象であるが、動物界でもとくに鳥類では、ごく一般的に認められるメイティングおよび子育てシステムである。ヒト以外の霊長類でも、原猿類から真猿類、そしてヒトを含めた類人猿グループにいたるまで一貫して存在する繁殖システムとなっている。

ヒト社会においてもペアボンド（一夫一婦）という形式での男と女の結びつきは顕著であるが、それとは異なる形態の婚姻も少なからず見られ、多様な婚姻制度の研究は19世紀における人類学の発祥以来その重要分野の一つとして認められてきた。そのように強い関心を引きながらも、人のペアボンドの起源や実態、機能と効用、あるいは婚姻制度と他の社会制度と関係など、さまざまな点において現在でも不明の部分が少なくない。しかし一方では、近年、霊長類学、古人類学、考古学、分子遺伝学など関連諸科学の進歩によって、これまでにない新しい視野からの知見も提出されている。

筆者は1976年以来、アフリカの熱帯雨林や乾燥疎開林帯で狩猟採集を営む人々の生態と社会について人類学的研究を続けてきた。狩猟採集生活はもっとも古くから存在した人類特有の生活様式であり、およそ1万年前、新石器時代の名の下に登場した農耕や家畜飼養・牧畜業などの生活様式が瞬く間に全世界を席卷する時代となっても、いまだ狩猟採集にかなりの部分を依存して生きている人々もいる。そして、20世紀中葉から現存する狩猟採集民への関心が高まり、各地でフィールドワークがおこなわれてきた。その結果彼らの生態や社会、信仰や宗教、美術や音楽などの芸術領域での活動も解明されてきた。しかし、20世紀後半から現在にかけて、それまで彼らが満幅の信頼をおいてきた自然環境が近代化やグローバリゼーションなどの影響で大きく損なわれ、もっとも長く安定して人類を支えてきた稀有な生活様式が地球上から急速に消失に向かっているのも残念ながら事実である。

本研究においては、人間社会のペアボンドの起源と機能、家族とペアボンドの関係、ボンドとコミュニティの中におけるペアボンドの働きなどを人類学的ならびに進化的視点から探ってみたい。

1. 霊長類と古人類のペアボンド

中川（2009）によると、霊長類社会のペアボンドは、メスの偏向分散、単雄単雌、一夫一妻、オスによる育児、縄張りなどの行動特性を含み、真猿類の祖型から類人猿の祖型まで連綿と受け継がれてきた社会的形質である。そして初期人類もそれを受け継いできた可能性（一夫一妻の単雄単雌集団、縄張り、父親による育児など）が高いという。しかし、現在のヒト上科では、テナガザル類が単雄単雌集団を作るのみである。

現生の類人猿が類人猿の祖型が持っていたと考えられる一連のそれらの形質を失った理由としてはまず第一に、類人猿たちの体の大型化に伴って母親の体重に比して赤ん坊の体重が軽くなったことがあげられる。その結果父親の育児補助がなくとも子どもが育つようになり、オスは育児へのエネルギー投資から解放され、そのエネルギーを多くのメス獲得に向けることができるようになったというのである。

現生の大型類人猿（オランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ボノボ）は、ゴリラのような一夫多妻の亜単独生活か単雄単雌集団、あるいはチンパンジーやボノボのような乱婚の複雄複雌集団を形成するようになった（中川 2009）。

ただし、この説にはいくつかの疑問も残る。なぜ現生の類人猿たちにおいて総じて身体の大型化が起き、同時に新生児にはそのような大型化が生じなかったのか。また、なぜヒトの祖先だけが、そのような進化の方向はとらず、一夫一妻の単雄単雌集団で縄張りを構えて生活し、父親による育児もみられたと推測されているようなことになったのか。その場合、他の単位（ペアボンド）との関係もテナガザル社会と同じような、排他的なものだということになるのか。

2. 古人類におけるペアボンド

ヒトとチンパンジーの共通祖先（LCA : Last Common Ancestor）と人類の最古グループに属する猿人との関係については、近年アルディピテクス猿人の研究が進みその詳細が明らかになるにつれ、その種分化のあり方に強い関心が注がれている（Fran Dorey 2018, Lovejoy 2009, White and Lovejoy 2015）。アルディピテクス猿人と称される化石人骨群は1992～1994年、エチオピアにおいて発見・発掘がおこなわれ、その詳細な報告が2009年に公表された。ほぼ完全に近い骨格の持ち主は「アルディピテクス・ラミドゥス（*Ardipithecus ramidus*）」と命名され、およそ440～420万年前の個体と推定されている。

アルディピテクスは平地では現生大型類人猿のようなナックルウオーキングではなく、れっきとした直立二足歩行をしていた明らかにヒトに分類される生物である。ただし、足の親指の形状などから、樹上生活にも適応しており、多くの時間を樹上ですごした可能性が高い。

歯列はおおむね類人猿的であるが、体格および歯から判断すると性的二形が小さい。犬歯は他の類人猿よりも小さく、尖らず、顎の突出もチンパンジーよりも小さい。ラミダスの歯から判断される食性はゴリラやチンパンジーよりもはるかに特殊化していないものであり、雑食性（opportunistic omnivorous）を示唆している。チンパンジーやボノボにみられるような歯、頭骨などのきわだった特徴はLCA以降の時代の進化であるとされる。

アルディピテクス猿人の生息環境は、樹木の多い湿ったウッドランドだったようで、食性はナッツ、フルーツ、葉、地下茎、昆虫、小哺乳類など、チンパンジー的なものだったであろう。前歯のすり減り具合から多量の葉食をした可能性も指摘される。文化面では現

生のチンパンジーのように自然具（小枝、茎、石）を使用した行動を備えていたと推定される。

Lovejoy (2009, 2015) は、ホモ・サピエンスの決定的な特徴で以下の 3 点、（1）地上性の二足歩行、（2）犬歯の役割縮小、（3）集団内単婚のうち、ラミダス猿人では（1）と（2）は明らかであり、（3）についてもその可能性が十分認められるという。その論拠としてあげられるのが犬歯と性的二形の縮小である。現チンパンジーの社会は、誇張されたメスの発情サイン、メスの乱婚性と集団内のオス間における激しいメイティング競争によって特徴付けられる。オスにおける犬歯の発達はそのようなオス間競争に適応した形質であり、性的二形の大きさもそれに付随したものであるとされる。一方、ラミダス猿人の縮小した犬歯はメスとの交尾機会をめぐるオスの争いが減少したことを示しているものとされる。そしてそのようなメイティング行動の変化の背景として、特定のオスとメスとのアボンドが発達が唱えられている。

なぜそのような特定のオスとメスとのパートナーシップが生まれたについては、以下のような要因が指摘されている。まずラミダス猿人ではヒト特有の二足歩行と相関して自由になった手（前肢）でさまざまな「もの」を運搬できるようになった。とくに食物の運搬は安全性の高い場所での摂食を確保すると同時に、オスからメスへの新しい社会行動、すなわち、母子への食物調達（food provisioning）を生じさせた。その場合、社会生物学的にはオスの行動を合理化するために、子どもの父性が担保される必要があるが、ペアボンドはそのためには最適な社会メイティングシステムである。

ヒトにおいては、チンパンジーなど複雄複雌群のメスが示すような周期的発情と、多くのオスの注目を引きメイティング競争を引き起こすような顕著な発情サインが見られない。これはペアとして同一のオスをひきつけておくためのメスの戦略的生理変化であると解釈される。またオスにおいては、そのようなペアのメスが産んだ子どもの父性への信頼が高まり、オスの母子への食物供給行動の基盤が固まったとされる。

3. オスから母子への食物供給行動とスカベンジング

上記の食物調達（food provisioning）によるペアボンド仮説はたいへんわかりやすいが、さまざまな点において実証的な検討が必要である。一つだけ例をあげておこう。上記ストーリーの要となっているのがペアボンドのオスから母子への食物調達であるが、はたしてラミダス猿人の段階でどのような現実性や必要性があったのか検証する必要があるだろう。たとえば、現生人類では出産後の新生児のサイズと運動能力などの状態からするならば、母子への援助、とくに栄養価が高く相対的に希少な食物（たとえば果実や肉類）の調達は大いに有効である。しかし、ラミダス猿人においては新生児の大きさや運動能力などについてはまったく不明である。現代人に似ているという保証は全くない。チンパンジーに似た程度のものであれば、あえてオスが母子へ食物供給をする必要があるだろうか。

またラミダス猿人など初期の人類においてはまだ石器などを用いた効果的な狩猟具もなかったことから、狩猟といっても現在のチンパンジーに見られるようなごく限られたものであったと考えられる。そこで言われているのが狩猟ではなく、自然死した動物、あるいは他の大型肉食獣が食べ残した獲物の横取りなどの、死肉あさり (scavenging) という手段である。しかし、これもそう簡単ではない。たとえば、タンザニアのサバンナで狩猟採集生活を営むハッザでの調査によると (O'Connell et al. 1988), オープンランドからの持ち帰りが栄養的に貢献する食物の第一は大型獣の肉であり、たしかに 1985~86 年に男たちが入手した中大型サイズの獣肉のうち 20% がスカベンジングによるものであった。そのように分量的には死肉あさはかなりの重要性を示しているが、成果の多くが運不運に大きく左右されるものであり、供給はきわめて不安定であった。生業としてまったくリアルな手段ではないという。また、死肉あさり自体そう簡単なものではない。たとえば、原野に放置されているような大型肉食獣の食い残しをあさっても、一般に可食部分がほとんどない。持ち帰りに値するような十分な量の肉がついている獲物は、大型獣がまだ獲物を食べているところに突進し、猛獣たちを追い払って入手したものだけである。槍や弓矢で武装した狩猟民であればそれも可能であろうが、さしたる武器もなかったはずのラミダス猿人などでは、そのような強奪的スカベンジングは無理である。

4. シェアリングと妻子への食物供給行動

次に、現生の狩猟採集民ではどのような食物供給行動が見られるのかという問題がある。しばしば「優秀なハンターは母子への食物供給という点で大きなアドバンテージをもっており、たくさん子どもをもつ」という主張がなされている。たしかに筆者自身そのような印象を感じたこともあり、これは当然のことにように思われる。しかし一般に現代の狩猟採集民社会では「ある程度の大きさを持った獲物は、無条件で、広範囲に分配するべし」というシェアリングの慣行がある。ハンターごとに自分の家族への実際の貢献度がどのように異なるのかはたんに彼が狩猟してきたものの大きさだけではわからない。一般に言えるのは、狩猟してきたハンターが自分の家族にだけ特権的に多くの肉をもたらすことはない、ということである。

スミス (smith 2004) によれば、優秀なハンターのアドバンテージとして以下のものを想定して、量的および質的観点から考察している。(1) 自分の妻子への直接的食物供給、(2) 二者間での互酬性、(3) 間接的な互酬性、(4) 第3者への能力アピール。その結果、上記の(1)~(3)における個人的な利点は決定的に否定できるものとはいえないが、広範囲で無条件のシェアリング慣行により、大きな獲物を持ち帰ることのアドバンテージはかなり減額されていると述べている。

ただし、シェアリングの慣行は自分がもらう立場になることも十分織り込み済みであり、その時には気兼ねなしに無償で食物確保の機会に恵まれる。長期的・大局的にはバンドならびに、個々人の生涯的バランスシートはけっしてマイナスではない。現生の狩猟採

集民社会ではペアボンドはけっして単独で存在したり機能するのではなく、バンドと呼ばれる居住集団に組み込まれる形で存在し、それによって集団としての長期的安定性を担保するものとして機能していることは確かである

5. ペアボンドの複雑さ、柔軟性、重要性

Quinlin (2008) によれば、人間のペアボンドは (1) 両親による子育て志向 (biparental) のペアボンドと、(2) オスによるメス防衛志向 (mate-defense) の二つの面をもつ。そして、そのどちらがより重要視されるかはそのときどきの環境要因や社会要因の関与によって大きく左右されるという。すなわち、オスの食物調達とメイティング・エフォート、これらを二者択一の原理とするのではなく、社会環境にうまく適合するような柔軟性 (phenotypic plasticity) がヒトの適応性であり、そこに注目する必要があるという。

子育て志向 (biparental) のペアボンドにおいても、単純に男の食物供給の度合いが大きければよいというものではないようで、ペアボンドの安定性という点からみると男女それぞれの家庭への食料寄与が半々に近いほど、そのペアボンドの安定性は高まるという。また、一夫多妻婚がおこなわれている社会では、それによってメスの数が相対的に低下するとオス間の競争が助長され、オスによるペアボンドのメス防衛志向が高まる。一方、なんらかの関係でメスの数が増えると、ペアボンドは不安定になる。また父親に代わる男たちによるケア (allo-parenting care) が重視される社会では、父親は子育て志向よりも新しい生殖の追求に走る傾向が高いという。さらに、良好なペアボンド関係において育った子どもは、そういった家庭のあり方を尊重するが、不全なペアボンドで育った子どもは、子育てよりもメイト探しに傾注する傾向があることも指摘されている。

結局のところ、ヒトのペアボンドの実態や起源は、予想されるよりもはるかに複雑な問題群を抱えていることが明らかになってきた。その実態について簡単に結論を出すことはとてもできない。ただし、いくつか確信を持っていえることの一つは、持続性の強いペアボンドという社会環境の下で子どもたちが成長することにより、両親と子ども、および兄弟姉妹の関係が終生途切れることなく維持されるというヒト特有の社会構築の基盤が築かれたことである。この点はやはりペアボンドという社会関係がホミニゼーションにおける極めて重要な位置を占めていることを如実に示しているといえるだろう。

引用文献：

- 中川尚史 (2009) 「霊長類における集団の機能と進化史—地理的分散の性差に着目して」
(河合編『集団—人類社会の進化』第4章)
- 寺嶋秀明 (2009) 「「今ここの集団」から「はるかな集団」まで—狩猟採集民のバンド」
(河合編『集団—人類社会の進化』第8章)

- Dorey, F (2018) *Ardipithecus ramidus*
[\(https://australianmuseum.net.au/learn/science/human-evolution/\)](https://australianmuseum.net.au/learn/science/human-evolution/)
- Dunbar and Shultz (2007) Evolution in the social brain. *Science*, Vol. 317:1344-1347.
- Fuentes (2002) Patterns and trends in primate pair bonds. *International Journal of Primatology*, 23(5): 953-978.
- Gavrilets S. (2012) Human origins and the transition from promiscuity to pair-bonding. *PNAS*, Vol. 109(25): 9923-9928.
- Hawkes K, Robers AR, Charnov EI (1995) The male's dilemma: Increased offspring production is more paternity to steal. *Evolutionary Ecology*, Vol. 9(6): 662-677.
- Lovejoy (2009) Reexamining human origins in light of *Ardipithecus ramidus*. *Science*, Vol 326: 74e1-74e8.
- Marlowe (2019) Male contribution to diet and female reproductive success among foragers. *Current Anthropology*, Vol. 42(5):
- O'Connell et al (1988) Hadza Scavenging: Implications for Plio/Pleistocene hominid subsistence. *Current Anthropology*, Vol. 29(2): 356-363.
- Quinlan (2008) Human Pair-bonds: Evolutionary functions, ecological variation, and adaptive development. *Evolutionary Anthropology*, Vol. 17: 227-238.
- White and Lovejoy (2015) Neither chimpanzee nor human, *Ardipithecus* reveals the surprising ancestry of both. *PNAS*, Vol. 112(16): 4877-4884.
- Wood and Marlowe (2011) Dynamics of postmarital residence among the Hadza: A kin investment model. *Human Nature*, DOI 10.1007/s12110-011-9109-5.

質疑応答と主な議論：

<集団とペアボンド>

- 集団としての安定性とペアボンドとしての安定性について
 - ・ 集団としての安定性とペアボンドの安定性の間に齟齬があるかないか
- 社会のかたちと婚姻形態
 - ・ 農耕社会、狩猟採集社会など社会によって可能な婚姻形態（つまりペアボンドの可能性）も異なる
- 集団とペアボンドの関係について
 - ・ ペアボンドの間でみられる社会性と集団内での社会性は大きく異なる
 - ・ ペアボンドの拡大として集団を考えていいとは思えない

<子育てとペアボンド>

- 身体形質と子育て
 - ・ 赤ん坊の大きさは骨盤と関係しており、育児とはあまり関係ないと思える

- 男性/オスの子育てへの貢献
 - ・ ラミダスの性的二形が小さいことがペアボンドと男性による母子への食物調達に繋がるといふ Lovejoy2009 の説は、ペア型が食物運搬にすぐ繋がるとはいえないと思う
 - ・ ゴリラのオスの場合
食餌供給という点では貢いでないが、授乳中のメスが子供を置いて1人で動ける状況をつくる。しかしゴリラも集団内では、オスからガードというようなことはない
 - ・ チンパンジーのオスの場合
チンパンジーの場合は集団レベルで、他の集団に子が殺されないようにする
子殺しは他集団によってされることが多い
- 子育てにおける集団メンバーの協力
 - ・ 化石人類でもおばあさん仮説のようなものはあるのか
 - Alloparental care 共同養育、繁殖
 - Allomothering キョウダイが養育に関わってくる という語がある
 ※集団サイズが大きくなってくるとキョウダイや祖母が養育に関わってくるため、そこにペアボンドをどう位置づけるか
- 社会のかたちと子のいちづけ
 - ・ 農耕社会では産まれた子が労働力になり、子どもがアクターになるからペアよりファミリーが重要。農耕社会と狩猟採集社会では重要となる社会単位が異なる。

<生物学親子関係と社会的親子関係>

- ・ ペアボンドのメリットとして遺伝的なものを考えたいが、実際はそうではないのではないか
- 社会的親子関係
 - ・ 自分の老後をみてもらう子は遺伝的繋がりが無いといけないわけではない
- 「血」が繋がった親子関係を重視する社会
 - ※親子の血が繋がっていることが重要とみなす社会がある、そうした考えはいつ頃から育まれてきたのか
 - ・ こんなに遺伝子というようになったのは、最近のことである

<制度としての婚姻と実践の関係>

- 制度としての婚姻と実態
 - ・ 婚姻関係が制度的だとすると、狩猟採集社会では一緒にいることが大切なのは
 - しかしピグミーは集団的まとまりがあって、姉妹交換婚もある
 - ・ ペアボンドは一応単婚というようなもので、死ぬまでずっと一緒というのではない
 - ・ 人間は共時的にみると単婚だけど、時間スパンを長くすると乱婚
 - ・ 制度的には複婚が可能であっても、2人でペアを作ることが多い

- 一緒にいることとペアボンド
 - ・ ペアボンドは「一緒にいることが大切」というが
 - サルのペアはずっと一緒にいるが、ヒトの男女はずっと一緒にいるわけではない
 - リスザルなどは一緒にいないと離れたら会えなくなってしまう
- ※だからこそ、人間の特異性として、ずっと一緒にいないでも特別な関係の二人であると認められる制度があることや、「帰る場所」というホームベースがることはすごい
- ヒトのペアの特徴
 - ・ ただ一緒にいるというのではなくて、名前、ルールがある、制度であることは重要
 - ・ ペアボンドの「ボンド」を示す要素としては、ずっと一緒にいる以外では、言葉があるかないか（この人とペアだという約束があるか）
 - ・ 人のペアボンドの特徴は、帰るところがあるというもの
- ホームベース仮説について
 - ・ 現実には一緒にいなくても、頭のなかに「我々是一緒だね」という意識、アイデンティティがあることの重要性
 - ・ ヒトはホームをもっている点が特異的、チンパンジーは離散集合するがホームはない
 - ・ 「ねぐら」がある動物は多いが、たまたま霊長類にはない
 - ・ 初期の議論ではペアボンドとホームベースはセットだったが、それをばらばらに議論するようになって、現在それらをまた戻そうとしている傾向がある

3-4) 共存作法—ソロモン諸島ガダルカナル島における競合と共生のあり方（藤井真一）

要旨：

本報告では、メラネシア地域における紛争処理の方策の一つであるコンペンセーション (*kompensesin*) に注目し、コンペンセーションを他集団へ要求するという行為が他個体・他集団との共存を実現するための作法であることを示そうと試みた。

河合香吏は、「同所的に他者とともに生きていくための社会的能力」[河合 2016: 3]、「集団」の中で「他者と相互に関わりあって生きる」術、方途のことを社会性と呼んでいる。この発想は、報告者が取り組んできた平和の人類学の現代的動向とも呼応する。近年の平和の人類学において、平和は「戦争や暴力の不在」という消極的な捉え方ではなく、「何かがある」という積極的な捉え方がなされるようになってきている。たとえば、小田博志は平和を「他者と共に生きられる関係性（あるいは条件）をつくっていくこと」[小田 2014: 6]と定義することで、より積極的な概念として使えるように鍛え直そうとしている。

ただし、平和の人類学では利他性や向社会性に注目する傾向が強い。本報告では、「〔社会性について考える場合、これまでは〕社会性のなかでもヒトにとくに発達しているとされる「利他性」や「向社会性」が取り上げられてきた。しかし社会性には他にもさまざまな特性

が含まれており、たとえば攻撃性も一種の社会性の発露として捉えるべき」とする花村俊吉の報告や「社会性は社交性（他個体とうまくやっていく能力）とはちょっと違うし、量の問題でもない。集合性とか集団を作る傾向ともイコールではない。向社会性というなんだかポジティブな方向だけに社会性を限定することもできない（ネガティブなものも含めての社会性ではないのか）」という中村美知夫の報告を踏まえ、他個体とうまくやっていくというポジティブなことだけでなく、敵対的な関係の結びつき方も社会性という言葉で考える。

文化人類学において、競合と共生を連続的なものと捉える視角は、贈与交換論の研究蓄積に見出すことができる。「理性を感情に対置すること。平和への意志を、上に述べた類の突発的な狂乱に対置すること。どの民族もこうすることによって、戦争と孤絶と停滞にかえて連盟と贈与と交際を得ることができるのである」[モース 2014: 449] と述べたモースを皮切りに、「交換は、平和的に解決された戦争であり、戦争は不幸にして失敗した商取引の結果である」[レヴィ=ストロース 2000: 159] と論じたレヴィ=ストロース、「〔ホップズの〕万人の万人にたいする戦いにかえて、モースは、万人のあいだでの交換を措定した。〔…〕『贈与論』とは、いわば一種の未開人向けの社会契約論にほかならない。〔…〕最初の同意は、権力者のためでも、ましてや社会という統一体のためにも、とりきめられたわけではない。社会契約の未開における類同物は、国家ではなく、贈物にほかならないからである。市民社会では、国家が平和を保証してくれるが、未開社会では、平和は贈物によってかちとられる」[サーリンズ 1984: 201-202] と論じたサーリンズなどがいる。このような、戦争（敵対的な関係の結びつき方）と交換（他集団とうまくやっていく手段）を連続的に捉える視点から、報告者が臨地調査を行ってきたソロモン諸島における伝統的紛争解決行為（コンペンセーション）を、他者とともに生きるための方途（社会性）の発露と捉え、考察した。

戦争と贈与交換はいずれも他者との関係がなければ行ないえない社会的相互行為である。そして、これらは特にメラネシア地域を対象とする民族誌調査と人類学研究の重要な主題であり続けている。メラネシア地域の戦争について記述、分析する研究の多くが、わずかな紙幅であるとはいえ、戦争を收拾するための方策についても報告してきた。これらの報告の多くに共通するのが、部族間抗争なり報復殺人（blood feud）を終結させるために贈与儀礼が行なわれることである。その中でも、ニューギニアの部族間抗争に関する研究は卓抜している。村落間や部族間の紛争を解決する和平のプロセスは、女性の交換、すなわち婚姻関係の構築に至るという。敵対集団間の対立状態を解決するために、婚姻関係を結ぶことで両集団の間にある「壁」を取り除く。このときに授受される贈与財は紛争解決の媒介物としてのみならず、婚資としても機能するのである。こうした伝統的な紛争解決は、コンペンセーションと呼ばれる。それは、政治的リーダーの立ち会いのもと、ブタや貝貨などの贈与財の授受を伴う儀礼を行なうことによって加害・被害両集団（あるいは個人）の間の悪化した関係を修復する行為である。ソロモン諸島では、殺人や窃盗、性的規範からの逸脱に端を発する集団間の報復殺人・血讐がしばしばみられた。しかし、ソロモン諸島の人びとが報復と憎悪の連鎖に身を任せていたわけではなく、むしろできるかぎり報復殺人などの暴力の連鎖を

避け、血讐を可能なかぎり終わらせることが得策であると考えられていたようである。それは、ロジャー・M・キーシング (Roger M. Keesing) の民族誌における次の記述からも読み取れる。

攻撃を受けたクランは、彼らの名誉と自尊心にかけて激怒し、報復しなければならなかった。しかし、ほとんどの場合は、報復殺人よりも損害賠償を受けることの方に関心があった。したがって、性的な違反、侮辱、呪詛、盗みの発覚、傷害は、殺人を引き起こすこともあったが、そのいずれの違反に対しても、不和を修復し、壊された社会関係を元通りにする損害賠償(damages)ないしコンペンセーション(compensation)のカテゴリーが存在したのである [Keesing 1983: 39]。

つまり、ソロモン諸島の人びとは報復や憎悪の連鎖に身を任せるのではなく、それらの発生を回避し、暴力行為の連鎖を断ち切るためにコンペンセーションを頻繁に利用してきたのである。ただし、コンペンセーションは、決して暴力的事実や被害者感情を消失させて加害者と被害者の間の人間関係や社会関係を元通りに修復するものではない。出来事(事件・事実)それ自体を否認するのではなく黙認し、当該の出来事を水に流して、両者の関係を修復するための行為なのである。それゆえ、コンペンセーションという手続きを経て解決された出来事は、蒸し返してはならないものとされる。しかし、現実には、事案の蒸し返しに伴う逆向きのコンペンセーション要求が頻繁にみられる。これは、物理的暴力の応酬が財の応酬に置き換えられていると考えられる。いずれにしても、コンペンセーションを要求することは、敵対的であれ友好的であれ、他集団と相互に関わって生きていくうえで重要な行為となっているように思われる。

参考文献：

河合香吏 (2016)「序章 進化から『他者』を問う—人類社会の進化史的基盤を求めて」河合香吏編『他者 人類社会の進化』1-18 頁、京都大学学術出版会。

Keesing, Roger M. (1983) *'Elota's Story: the Life and Times of a Solomon Islands Big Man*. New York & Tokyo: Holt, Rinehart, and Winston.

レヴィ＝ストロース、クロード (2000)『親族の基本構造』福井和美訳、青弓社。

モース、マルセル (2014)「贈与論」『贈与論 他二篇』森山工訳、51-453 頁、岩波書店。

小田博志 (2014)「平和の人類学 序論」小田博志、関雄二編『平和の人類学』1-23 頁、法律文化社。

サーリンズ、マーシャル『石器時代の経済学』山内昶訳、法政大学出

質疑応答と主な議論：

- ガダルカナル系住民とマライタ系住民の民族紛争（/部族対立？）解決の試みが上手くいかなかった背景について
 - ・ 最初はマライタの一部の言語グループとガダルカナルの一部のグループの対立だったが、対立している間に、マライタ対ガダルカナルというようなまとまりと構図が形成
 - ・ 民族紛争を州知事間で伝統的和解儀礼をしても和解に至らなかったのは…最初に個別の当事者レベルでコンペンセーションしたらうまくいったのか？
- 知事は集団のリーダーとして認められていないから、「ビックマンと私との関係」のような結びつきが知事にはない、代表制をもたない、正統性がない

- 政治システム・政治組織・対立の処理方法について

ビックマン社会（平等社会）とコンペンセーション

 - ・ 階層社会ではなくビックマン社会だったから、制度的にフォーマルな対処法があるのではなく、何かあったらまずコンペンセーションと訴え、そうしたら周りがそれに対応しなきゃいけないという社会
 - ・ 社会化の進化史ということで「お前は俺にコンペンセーションを果たす義務がある」といえるような地平ができたのがいつのことか、近代以降なのか、それ以前なのか
 - ・ またそうした義務があるとしたら、それがモラルティに関わるのか、それとももっとしっかりしたクランなど社会組織にかかわるのか
- さまざまな「仲直り」の方法と、そこにおけるコンペンセーションについて
 - ・ コンペンセーション以外にも、少し離れて冷却期間をおいて戻る、とかごめんなさいという仲直り技法もある
 - ・ 想像上はコンペンセーションし合った同士も一緒に生活している、同所的だけど視認できるとは限らない
 - ・ 人間の場合は、想像というかたちで空間が伸び縮みする、だけど霊長類と繋げるために同所的という言葉を使っているが、レベルを区別して話さないと混乱をまねく

- コンペンセーションについて
 - ・ コンペンセーションを繰り返すのは交渉のひとつの手段でうまくいかないと殺人になる同じ論理がはたらいているとして、殺人じゃない方法としてコンペンセーションがあるから、コンペンセーションに重みがある
 - ・ 刑法で捌くという方法もあるが刑法は国が定めたルールを破ったかどうかというのに対し、コンペンセーションはその人とその人の間のやりとり
 - ・ 遠くの村でコンペンセーションがあったらしいという話をして皆が恐れる、法によって罰する社会でないため、コンペンセーションが制裁のように機能していると考えられる

- 表現方法について

- ・コンペンセーションの内容によって表す言葉が違う（既婚者との浮気を表す語、盗みを表す語…など）
- ・「報復」という現地語があるのか？やられたからやり返すという語はある
寝取られたからやりかえす、傷つけられたからやりかえすというように、こういう行為には〇〇という語で表されるコンペンセーションというように、それぞれ細かく分けて対応している
- ・しかし、「コンペンセーション」という上位カテゴリー、総称に対応する現地語はない

● コンペンセーションを通じた集団化

- ・戦争することが集団をつくるみたいに、元々集団がはっきりしていなかったものが争いでまとまりが形成されてく
- ・もめごとを集団として対処することで集団性みたいなのができて、協力関係みたいなのがでてくる、みたいなものがあるのでは

● 集団内の個人間の競合と集団間の競合の区別について

- ・コンペンセーションが個人間でも集団間でも使える語だからといって、両者を同じようにとらえていいのか
- ・「群間コンテスト」と「群内スクランブル」という区別があるように、群れの中（私とあなたの競合というもの）と群間（群れのあいだの競合というもの）どちらも競合だが、分けているように、コンペンセーションでも区別していいのでは

● 平等社会におけるコンペンセーション

- ・個人間の対立、集団間の対立というようにレベルが違う対立であっても、それを現地人が流用しているというのは面白い
- ・メラネシアはビッグマン制で平等社会だから、誰もがコンペンセーションと文句を言える、全員が発言権をもつ、だから階層社会ではないけど調停をするビッグマンが必要で、その調停のために自分も意見をいう、いっぽうポリネシアは首長制でチーフがいる階層社会
- ・小さいレベルでコンペンセーションがきくなら、なぜ戦争まで発展するのか
→ 社会的な不安定さが関係しているのでは
近年の開発と土地や天然資源にたいする権利のあいまいさ